



TITLE:

『自負と偏見』における音楽に関する一考察

AUTHOR(S):

谷, 茉祐子

CITATION:

谷, 茉祐子. 『自負と偏見』における音楽に関する一考察. Zephyr 2010, 22: 60-82

ISSUE DATE:

2010-03-19

URL:

<https://doi.org/10.14989/108310>

RIGHT:

『自負と偏見』¹における音楽に関する一考察

谷 茉莉子

序

オースティンは自身の書簡や親族の回想等から音楽好きであったことが知られている。『分別と多感』(*Sense and Sensibility*) や『説きふせられて』(*Persuasion*) ではヒロインの趣味はピアノであり、音楽は登場人物の造型や物語の進行に大きな影響を与えている²。作品の登場人物たちは、しばしばピアノを弾き歌う。例えば『エマ』(*Emma*) ではフランク・チャーチルがジェーン・フェアファックスにピアノを匿名で贈った事が作品中の大きな謎の一つとなっている。このピアノのためにヒロイン、エマ・ウッドハウスの錯覚がより助長されたとも考えられる。また、『説きふせられて』の主人公アン・エリオットは、バースでのコンサートで、かつての婚約者フレデリック・ウォントワース大佐の未だ変わらぬ愛情を悟るのである。

『自負と偏見』(*Pride and Prejudice*) では前述の二作品のように頻繁に音楽が用いられているわけではないが、エリザベス・ベネットとフィッツウィリアム・ダーシー双方の人格を浮かび上がらせ、愛情を誘発するために、音楽はある種の役割を果たしていると思われる。本作品では音楽がどのように用いられているか、そしてそこにはどのような意図が込められているかを考えてみたいと思う。

第一部では、登場人物の演奏場面を通じて各の性格について論じ、その上でヒロイン、エリザベスの演奏がどのような役割

¹ 『高慢と偏見』とも訳されることの多い本作品であるが、本稿では中野好夫の翻訳に従い、『自負と偏見』とする。

² パトリック・ピゴー (Patrick Piggott) は、プロットや登場人物の性格を表す際に音楽が使われていると指摘している (314)。

を果たすかを検討する。彼女はオースティンの「お気に入り」の主人公であるにもかかわらず、その演奏はそれほど巧みではないように描かれている。第二部ではその理由を他作品との比較や、時代背景なども踏まえて考察する。

1.

まずエリザベスと他の登場人物との演奏を比較し、前後の記述から彼女の性格を浮かび上がらせる役割を果たしている音楽に言及する。次に、エリザベスとダーシーの間に愛情を喚起する装置、そして対話の代替物となり得る音楽について考察を行う。

エリザベスが作中ピアノを弾いたのは二度であり、それは二度共ダーシーの面前である。まずエリザベスの最初の演奏は、ルーカス邸の舞踏会に於いてである。そこでは親友シャーロット・ルーカスの勧めを散々嫌がった後、彼女はピアノに向かう。その演奏に対しては概ね好意的な評価が下されている:「歌の出来は、もちろん完全だなどというのではなかったが、まんざらでなかった。... [妹メアリーと比べると]その点エリザベスのほうは、まことに気取りがなく、自然であり、それだけに、腕こそ半分もできていないが、聞く人はみんなよろこんで聴いた」³ (25-26)。

エリザベスの二度目の演奏は、ダーシーの叔母、レディ・キャサリン・ド・バーグの邸宅ロージンズに於いてである。彼女はダーシーの従兄弟フィッツウィリアム大佐の要望に応じて演奏する。この際叔母のおしゃべりに辟易したダーシーはわざわざピアノの方へと移動し、エリザベスの顔が見える位置に席を

³ 本稿での *Pride and Prejudice* からの全ての引用は中野好夫による翻訳 (『自負と偏見』新潮社、2009年) を参照し、必要に応じて変更を加えた。ただし、引用のページ番号は末尾に挙げた Penguin Books による。

占める。彼のこの行動は彼女への愛情の発露と見ることができるだろう。巧みな演奏を聴きなれているはずの彼が、意外にも彼女の演奏に「現にあなたの演奏を聞かせていただいた人間はですね、誰ひとり、欠けるところがあるなどとは、考えるはずありませんからね。」(171)と賛辞を呈する。ハワード・S・バブ(Howard S. Babb)はダーシーが「この言葉にエリザベスへの深い愛情を込めている」と述べている(140)。

エリザベス以外にピアノを弾いたり、歌を歌ったりする人物としては彼女の妹メアリー・ベネット、近所に新しく越してきたキャロライン・ビングリーとルイーザ・ハーストのビングリー姉妹が挙げられる。それぞれの演奏回数は、メアリーとキャロラインが三度、ルイーザが一度である。もっともメアリーとキャロラインの三度目の演奏に関しては詳細な描写もなくほぼ背景となっている。またルイーザの演奏はキャロラインとの二重奏となっているため、ここでは考慮しない。そうすると各自重要な演奏回数は二回ずつということになる。而して興味深いのは、最初の演奏が彼女たちの人格を表すものであり、二度目はエリザベスとダーシーの恋愛に重要な一役を買っていることである。

まず、妹のメアリーを見ると、彼女が最初に演奏するのはエリザベスと同じくルーカス邸においてである。しかしながら、エリザベスの次に演奏したメアリーへの評価はかなり手厳しい。

妹のメアリーが、サッサとすすんでピアノの前に坐った。なにしろ姉妹じゅうでは、ただひとり不美人のほうだったので、自然学問や芸事には励みが出て、それだけに、なにかというひとく見せたがった。

才能も趣味もある女ではなかった。聞かせたい一心から、稽古はたしかに熱心にしたが、それといっしょに、やはり虚栄からくる知ったかぶりや、妙な気取りもひとく鼻につ

いた。それは、かりに彼女よりはるかに名人がしてみせたとしても、損にこそなれ、決して得にはならなかったろうからだ。．．．メアリーは長い協奏曲を一つ弾いたあと、部屋の方で、ルーカス家の娘たちや二、三人の士官たちといっしょに、しきりに踊っていた妹たちの求めもあつてだが、むしろすすんでスコットランドとアイルランドの曲を歌い、一応とにかく賞賛と感謝とをうけた。(25)

演奏評もさることながら、続く人物評は手加減なしの厳しさである。メアリーへの追及はこれでは終わらず、次のネザフィールドでの舞踏会でも彼女への批判は止むことはない。「声も弱いし、態度も妙にわざとらしい」(98) ため、こうした場所に向いていないにも関わらず、いったん歌いだしたメアリーは、場もわきまえず歌い続け、なんとか止めさせようというエリザベスの必死の願いも妹には届かない。妹に恥をかかせまいと父に頼るものの、ベネット氏の対応は「メアリー、ああ、もうそれでけっこう。ほんとうに長いあいだ、よく楽しませてくれたねえ。こんどはほかのお嬢様方の番だからね。」(98) という冷淡なものであった。それを見たエリザベスは父の言い草に驚き、さぞ傷ついたであろう妹の心情を思いやり、一人悲しむ事になる。ここでもメアリーの無作法は姉の思慮深さと対照的に描かれている。注目すべきは、一見理知が勝って冷たくも見えるエリザベスの姉妹愛であろう。冷笑的な対応をする父ベネット氏とは対照的に妹の受けた痛みを心を寄せるエリザベス、作者の意図はこの点にあると思われる。正しく、この光景はダーシーにも強い印象を残し得たようで、彼は手紙でエリザベスが家族の欠点に心を痛めていることを十分思い遣り、更にその中でもけなげにも立派に振る舞ったと称賛している。

次に、キャロラインは、悪性の風邪を引いた姉ジェーン・ベネットを看病するためにエリザベスがネザフィールドに逗留中、

二度演奏する。最初の演奏はエリザベスが到着した日の夜である。姉の看病のためにエリザベスが二階へ上がった後、キャロライン姉妹はジェーンを心配する素振りもなく退屈を訴え、二重奏で気を紛らわす。病に苦しむ姉を思い遣るエリザベスに対して、利己的で自らの楽しみを追及するビングリー姉妹という構図が出来上がり、キャロラインの冷たさはエリザベスの優しさと対照的かつ効果的に表現されている。そして、キャロラインの二度目の演奏は数日後のことである。ダーシーがエリザベスとキャロラインに音楽を所望し、断固として固辞したエリザベスに対して、キャロラインは意気揚揚とピアノに向かう。彼女はまず姉と歌の二重奏を、次には一人でイタリア歌曲や陽気なスコットランド歌謡を披露する。しかしキャロラインが好意を抱き、聞いて欲しいと願ったダーシーは彼女の演奏を聴くのではなく、ピアノの上の楽譜を眺めるエリザベスに視線を注ぐ。さらに皮肉にも、その演奏は初対面でエリザベスに紹介されることすら断ったダーシーに彼女にダンスを申し込ませる結果となるのである。エリザベスは踊らなかったものの、ダーシーは以下のような気持ちを抱く：「ダーシーなどは、こんなにも強く心を惹きつけられた女は、はじめてだと思った。もし彼女の身内たちが、あんな低い身分のものでなかったら、こいつはちょっと警戒を要するぞ、といったような気持ちさえした」(51)。これを見たキャロラインの敵愾心は煽られ、エリザベスの悪口を言うことで発散される。最終的にペンバリーのダーシー兄妹の前で彼らの仇敵ジョージ・ウィカムのことを口にしたことで、意に反してダーシーをますますエリザベスに近付けてしまった。

演奏はせずとも音楽について語るキャサリン・ド・バーグ夫人も大きな役割を果たしている。尊大なレディ・キャサリンとの音楽談義はエリザベスの礼儀正しさを示す格好の機会となる。夫人は初対面のエリザベスに音楽に関するものを含む多々失礼な質問を投げかけるが、エリザベスはそれらに耐え、礼儀正し

く答えている。レディ・キャサリンはエリザベスに音楽をするのかと尋ね、エリザベスが「ええ、少しばかり」(161)と答えると、「じゃ、いつか伺わせていただくわ。わたしの家のピアノはね、とても立派なものですのよ。たぶんまあ—ええ、ぜひ一度弾いてくださらない？」(161)と自家の楽器の自慢をする。後日、ダーシーとフィッツウィリアム大佐を交えた晩餐会でも、彼女は談笑している甥とエリザベスの会話に割って入り、以下のように述べている。

「音楽の話ですって？それならば、もっと大きな声でお話ししてくださらない？音楽のことなら、わたくしも、なにより大好きなお話なんですもの。音楽のお話ならば、わたくしもお仲間入りしなくては。わたくしほどに、ほんとうに音楽を愛し、生まれつき趣味をもっている人間は、イギリスじゅうにもまずいないつもりなんですの。これでちゃんとお稽古でもしていれば、ずいぶん名人になっていたろうにと思いますのよ。アンだってそうなんですの、健康さえゆるしてしましたらばね。とてもじょうずになってたろうと、わたくし、はっきりそう思ってますの。」(169)

その後エリザベスの演奏中も、夫人は自身と娘の音楽の才能を自慢し続けるが、逆にうんざりしたダーシーはエリザベスの傍へと移動する。それでもなおレディ・キャサリンはエリザベスの演奏中に、次のようにダーシーに話しかける。

「[エリザベスが] もっとお稽古さえなされば、そしてロンドンで先生にでもおつきになれば、もっと完全にお弾けになるのにねえ。趣味はアンほどじゃいらっしゃらないにしても、運指法はとてもおよろしいんじゃない？それで、あの子ですけどもね、健康さえゆるせば、ずいぶん名手にな

ってたと思うんですよ。」(171-172)

彼女の批評はエリザベスへの感想に始まるが、後には全てが娘アンの自慢へと帰結する。それらは丁重に対応するエリザベスの礼儀正しさ、忍耐強さをひとときわ際立たせた。オースティンは彼女をド・バーク親娘と対比させることで、知性や明るさが強調されがちなエリザベスの、表面に表れにくい謙遜な資質を極めて巧みに表現するのに成功している。またキャロラインの場合と同様、娘を引き立たせようというキャサリン夫人の企みも図らずも却ってダーシーをエリザベスに近づける結果となっている。

このように、これまで扱った人物の演奏、および音楽談義はエリザベスの内なる美德を確実に映し出す役割を果たしている。しかし、オースティンの演奏に込めた思惑はこれだけではないと思われる。エリザベスが作中で演奏するのは二度とも「ダーシーの面前において」である。この二人は互いの自負と偏見から前半ではなかなか会話が弾まず、打ち解けることができない。エリザベスの演奏は二人の会話を巧みに促し、双方の愛情を育むのに大いに役立っていると推測される。前半ではダーシーの前で二度ピアノを弾き歌うエリザベスであるが、なぜか後半になると彼女は演奏しなくなる。それはエリザベスに限ったことではなく、ペンバリーでのジョージアナ・ダーシーへのピアノのプレゼント以降音楽に関することは全く描かれていない。唯一チャールズ・ビングリーがジェーン・ベネットに求婚する際にメアリーが二階でピアノの練習をしているのみなのだ。これはエリザベスの心境の変化に起因するのではないだろうか。後半部ではエリザベスとダーシーは互いに出会った当初とは違った心境で接しており、様々な事柄を語り合えるようになっている。バブが指摘しているように、『自負と偏見』における演奏は対話の代替となっているのではないか(140)。

二人の会話を見ると、前半では、ダーシーはエリザベスに好意を感じながらも、内気な性格の為に彼女に積極的に話しかけることができない。エリザベスは自身の偏見から、親しく交わろうという意思は全くない。前半ではエリザベスとダーシーは挨拶やプロポーズを含め十回会話をしている。しかしながらそのうちの六回はある程度の長さのものであるにもかかわらず、二回を残して失敗に終わっている。

失敗に終わったものを見ると、まずはジェーンの風邪を看病するためエリザベスがネザフィールドに滞在中の会話である。ダーシーがジョージアナに手紙を書いている際、ビングリー、ダーシー、そしてエリザベスはビングリーの気質から日曜日のダーシーの威厳に至るまでの議論を展開する。ビングリーの、自宅にいるときのダーシーほど怖い人は知らないという言葉に際して彼は苦笑し、その話題を止めるよう頼む。次の例は、ネザフィールドにおける舞踏会での会話である。ダーシーはエリザベスにダンスを申し込み、その申込みがあまりにも唐突だったため、絶対に彼とは踊らないと豪語していたエリザベスは思わず承諾してしまう。しかし、エリザベスには会話を楽しもうという気はさらさらなく、だんまりを決め込むのである。

しばらくは、お互い一言も口もきかずに立っていた。この分では、二回とも、無言のままで終るかもしれない、と彼女には思えてきたし、はじめはまたそれで押し通すつもりだったが、そのうち、突然思いついたことは、むしろなにかしゃべらせたほうが、かえって相手を苦しめることになるのではないか、ということだった。(89-90)

当然、この後の会話は円滑には進まない。彼女は「もっともある特別な方にはね、なるべくお返事をいただかなくてすむように、話をもっていきますのが、いいのかもしれませんがねえ」

(90) とも話す。ダーシーの会話を促そうというあらゆる試みは彼女の頑強な抵抗にあって失敗に終わる。

その失敗の中でも最悪なのは、ダーシーの求婚である。ダーシーは、エリザベスの階級が結婚を思いとどまらせようとしたと正直に述べ、ビングリーとジェーンとの間を引き裂いたことも認める。これはダーシーの誠実さの表れでもあるのだが、未だ偏見に凝り固まっているエリザベスにとっては失礼を通り過ぎ侮辱以外の何物でもない。怒り心頭に発したエリザベスは、彼の行動を激しくなじるのである。

一方、成功例は次の二例である。最初は、エリザベスとダーシーが各々の欠点について議論したときであった。彼は一度悪く思った人間についての意見は決して変わらないという自分の欠点について正直に打ち明け、彼女はそれを「すると、ダーシーさんの欠点は、ひとりのこらず人間を憎むってことなんですね」(57)と冗談めかして切り返す。対して、ダーシーは「じゃ、ベネットさん、あなたのはですね。ことさら故意に、人の言うことを誤解することなんですかねえ」(57)とにこやかに応酬する。このときは退屈し切ったキャロラインがこの会話を遮りピアノの蓋を開けたため、会話は平和なうちに終わっている。

次は、ロージングスでの晩餐会でのことである。話題はダーシーが最初に登場したときのことに遡る。彼は自分の内気さを訴えるが、エリザベスはその言い訳を認めようとせず、自分の指を引き合いに出して遠回しに彼を責め、ダーシーはそんな彼女の言い分を認めている。

「だって、わたくしのこの指でしょう」と、エリザベス。
とても上手な方のなさるように、自由にピアノの上を動くとは思いませんわよ。力の点でも、速さの点でも、とてもかないっこありませんし、効果だって、ぜんぜんちがいま

すわ。でも、それはわたしが悪いというもの一つまり、お稽古をしないからですわねえ。なにもわたしの指そのものが、ほかの御上手な方とはちがって、動かない悪い指だなんては思いませんことよ。」

ミスタ・ダーシーは軽くほほえんだ。「重々あなたのおっしゃるとおりですよ。つまり、あなたのほうが、時間の使い方がお上手だったというわけですね。．．．つまり、わたしたちは二人とも、知らない人たちの前では演奏しないという、ただそれだけのことじゃありません？」(171)

これは両者共心穏やかに終わった稀有な例であり、ダーシーがエリザベスとの共通点を見出していることから注目にも値する箇所である。エリザベスが見知らぬ人物の前で演奏するかどうかはさておき、現に彼女はネザフィールドで演奏して欲しいという彼の要請を固辞しており、このことを彼は自分との類似点とみなしているのである。つまり、この会話においてエリザベスのピアノのレベルはダーシーの恥ずかしがりやな性格レベルと釣り合っていると思われる。そんなエリザベスの演奏が好意的に解釈されているところから、ダーシーのはにかみも好意的に評されるべきで、高潔な人格の表れであるという伏線になっているのではないだろうか。

これらのことより、二人の対話を進めるためには潤滑油のようなものとして音楽が必要であったのではないかと考えることができる。実際、音楽なしには会話はスムーズには進んでいない。エリザベスとダーシーとは対照的に、ジェーンとビングリーは出会った瞬間から互いに好意を持っていた。ビングリーはジェーンのことを「天使といえども、あれほどの美しさは考えられない」(18) というほど褒めそやし、ジェーンはビングリーを「理想の青年」(16) と述べ、互いにできるだけ一緒にいようとし、会話を交わしている。ド・バーグ夫人の探索から推

測するにジェーンはピアノも歌も嗜まないようであるが、要するに彼女は音楽を必要としないのである。

出会った当初こそエリザベスに批判的だったダーシーだが、徐々に彼女に興味を示すようになる。その最初はルーカス宅でのパーティーであったが、彼女の演奏を聞いた後、ダーシーはキャロラインにエリザベスへの好意を仄めかしている。エリザベスの演奏は決して華麗なものではないが、銜いのない人柄が滲み出るような気持ちの良い演奏であり、この演奏がダーシーにも影響を及ぼしたと見ることはできるのではないか。次にエリザベスが演奏するのはロージングスでの晩餐会の折にだが、ここでは演奏しながらその合間に二人にしては珍しく楽しげな会話を交わしており、お互いにとって楽しい一夜となったことが窺える。キャサリン夫人曰くダーシーはアンの婚約者であるが、ここでは彼は全く彼女に関心を払っていない。話しかけるわけでもなく、叔母の賛辞にも耳を傾ける様子もない。アンを目の前にしたダーシーが注目しているのはひたすらエリザベスの一挙手一投足であり、アンのことはまるで忘れ去っているかのようだ。このことから、ダーシーがアンと結婚する意志のないことが読み取れる。この数日後に彼はエリザベスに最初のプロポーズをしており、彼女の演奏は彼の愛情を強める役割を果たしたと言えるだろう。

一方、偏見がなくなるまでの、エリザベスのダーシーに対する感情は嫌悪感ともみなせるものである。ダーシーが高慢だというのみならず、「[エリザベスは] まあ相当じゃあるがねえ。だが、とても心を動かされるほどのもんじゃない。」(13) という彼の言葉を偶然聞いてしまったがためにエリザベスは自尊心をいたく傷つけられ、そのため彼女はなかなかダーシーへの偏見から脱け出ることができない。この悪感情を払拭するのに役立ったのが彼の兄妹愛である。妹のピアノの上達振りを問う叔母に対して、彼は愛情深く妹の上達を褒め称え、練習熱心なこ

とを報告する。このことからエリザベスはダーシーを「この人にも、やさしいところはあるのかな」(201)と驚きをもって眺める。彼の邸宅ペンバリーを訪れた際にも、ダーシーからジョージアナへのプレゼントであるピアノが到着し、家政監督レイノルズ夫人もダーシーのことを褒めそやし、太鼓判を押している：「旦那様〔ダーシー〕という方は、いつもこうなんでございますよ。お嬢様〔ジョージアナ〕がおよろこびになりそうなことと申しますと、すぐもうしてお上げになるんでございまして、いやだなどとおっしゃることは、決してございません。」(239)。ダーシーの優しさはエリザベスにとって意外な発見であり、世にも冷血な人間との悪評を覆すこととなった。こののち彼からの手紙を読んだエリザベスは、初めて自分の誤解に気づき、自分の過ちに深く恥じ入る。その後ペンバリーで彼の肖像画を見た時、彼女はそのモデルへの愛情を感じるようになる。

たしかにそのとき、エリザベスの心には、この絵のモデル当人に対して、かつてあの深い接触があったころ感じた以上の、親愛感が湧いた。... 絵の中からは、じっと彼の眼が、彼女の方を見つめている。そのカンヴァスの前に立っていると、エリザベスは、なにかはじめて彼の視線に対し、深い感謝の念が湧いてきた。そして、いまさらのように、彼の行為のあたたかさが思われ、それにしては拙いその現われ方も、いくらかゆるされるような気がするのだった。

(240)

このように徐々に距離が縮まりつつある最中、エリザベスは妹リディア・ベネットと稀代のプレイボーイ、ジョージ・ウィカムが駆け落ちしたとの知らせを聞く。やむを得ずダーシーにその出来事を話した時には、とうとう彼に深い愛情を感じるようになっていた。このように、エリザベスがダーシーの妹への思

いやりを知ったことが正しい人物評、そして強い愛情へと変遷を遂げる基礎となっているのである。

エリザベスがダーシーへの反感を改めて以後、演奏シーンは描かれず、彼に感謝の念を抱くようになってからは音楽に関する描写は一切この作品から消えている。ダーシーは演奏がなくとも、自らが望む時に彼女を観察し、話しかけることが可能となったのである。

2.

様々な役割を担うエリザベスの演奏であるが、『分別と多感』(*Sense and Sensibility*)の主人公マリアン・ダッシュウッドやアンのように“音楽的才能”を認められる水準には達していないように描かれている。オースティンのお気に入りヒロインであり内面的にも作者に近い人物として造形されたと考えられるエリザベスが、名人芸に至らないのは不思議である。自身は練習熱心であったにも関わらず、エリザベスの演奏レベルが一般的であるのはなぜか。当時の音楽教育の変化や、ジェントリー階級における音楽への意識も参考にしつつその理由に関して探っていくものとする。

オースティンはピアノフォルテを弾くのが好きだったようだ。幼少時はウィンチェスター寺院のオルガン奏者であったジョージ・ウィリアム・チャードからピアノを習っていた。彼女の楽譜は未だチョートンに保存されており、その中には彼女自身の記譜によるものも多い。オースティンが音楽好きだったことは親族の回想からも窺え、姪のキャロライン・オースティン(*Caroline Austen*)は叔母が練習していたことを回想録の中で述べている。

ジェーン叔母は一日を音楽で始めました。叔母には生まれつきの趣味があったと思います。彼女はその趣味を持ち

続けました、先生はいませんでしたけれど。(私が聞いたところによれば)決して人前では演奏しなかったそうです…。叔母は朝食を取る前に練習していました。—というのも、そのときなら叔母自身の部屋があったのです。—毎朝時間通りに練習していました。—叔母はとてもかわいらしい曲を奏でたと思います—そして、私は傍に立ってそれを聞くのが好きでした。(C. Austen 6-7)

彼女のお気に入りであった甥、ジェームズ・エドワード・オースティン＝リー (Austen-Leigh) も同様のことを述べている。

ジェイン自身は音楽が好きで、歌う時も会話の時も美しい声をしていた。…。夜は自分でピアノの伴奏をつけて、昔の簡単な歌をいくつか歌うことがあって、その歌詞や曲は今では聞かれなくなかったが、私の記憶の中には今でも残っている。(Austen-Leigh 88) ⁴

これらの回想からわかるように、オースティンは熱心にピアノを練習していたようである。彼女はこの姿勢を、家族内での舞踏会のために黙々とピアノを弾くアン・エリオットに投影させている。しかし、オースティンは公共の場では一切演奏をしなかった。ウィリアム・コリンズの口を通して述べられているように、彼女にとっての音楽とは「清浄な楽しみ」(99) だったのである。

さらに姉カッサンドラ・オースティン宛ての 1813 年 1 月 29 日の手紙を読むと、エリザベスはオースティンのお気に入りの女主人公であったことがうかがえる。「…正直言って私〔オー

⁴ 本稿での引用は永島計次の翻訳 (『思い出のジェイン・オースティン』近代文藝社、1992 年) を参照し、適宜変更を加えた。ただし、引用のページ番号は末尾に挙げた Oxford UP による。

スティン] も、彼女 [エリザベス] はこれまで活字になったどんな人物よりも魅力的だと思いますし、少なくとも彼女を気に入ってくれない読者は許せそうにないわ」(Austen, *JA's Letters* 201) ⁵。また、語り手はエリザベスに「わたしは、とにかく笑うことが大好きなんですよ。... 少なくとも、よいもの、かしこいものを、からかいの種にしたおぼえはありませんの。正直な話、人間の愚行、くだらなさ、そしてまた気まぐれや矛盾などを見ていると、つい面白くなりましてね。できれば、もちろん笑いの種にしてやりますわ。」(56) と言わせている。さらに、エリザベスの趣味の一つはオースティンと同じく人間観察である。マーヴィン・マドリック (Marvin Mudrick) が指摘しているように、エリザベスは作者の価値観を体現している点も多い (95)。

そんなエリザベスが音楽に達者であるとされていないのはなぜか。また、『自負と偏見』においてエリザベスとジョージアナを除いて音楽を嗜む人物が否定的に描かれているのはなぜであろうか。歌いもせず、ピアノも弾かないジェーンはエリザベスには劣るものの主要人物のひとりであり、良識を備えた女性である。善良で正直なだけでなく、「すぐれた理知、そしてまたそれに輪をかけた美しい人柄」(328) と謳われ、ダーシーを忌み嫌うエリザベスをたしなめ、彼にも悪意は抱かない。もっとも他の作品でも得てして演奏者は否定的に描かれがちである。この背後にはオースティンの当時の教養としての音楽のあり方を否定する狙いがあったと思われる。

1789 年に『クラヴィーア教本』を出版したダニエル・G・テュルクに言わせると、良い演奏には譜読み・演奏技術が必要であり、そして最も重要なのが演奏表現であった。そして良い演

⁵ 本稿での引用は新井潤美による翻訳(『ジェイン・オースティンの手紙』岩波書店、2005 年)を参照した。ただし、引用のページ番号は末尾に挙げた Oxford UP による。

奏表現とは「1. 演奏と譜読みの技量とすでに習得していること・拍節感がたしかであること・通奏低音や、演奏すべき楽曲そのものについての知識を有すること、2. 演奏が明確であること、3. 支配的な性格を表現すること、4. 装飾音やその他の手段を有効に用いること、5. 音楽によって表現されるべき感情や情熱にたいする的確なセンスをもつこと」である（384）。また、『正しいクラヴィーア奏法』を著したカール・フィリップ・エマヌエル・バッハは「パッサージュはいくらむずかしくても、よく練習しさえすればどうにかなるが、それよりもずっと大変なのは、単純な音符をうまく演奏表現することである。この単純な音符は、クラヴィーアを実際以上に簡単に考えている多くの人をてこずらせる」（177）と語り、良い演奏とは「楽想を歌ったり演奏したりしてその真の内容とアフェクトを聴衆の耳に感じとらせる技量」（173）であると定義している。オースティンの意見はまさにこれらに賛同するものであろう。エリザベスへの評価をみると、自らも認める練習不足から強弱や速さといった演奏技術にはまだまだ改善の余地があったかもしれないが、彼女の知性で良い演奏表現ができていたのではないだろうか。また当時の技術には運指法が大きな比重を占めており、これは高慢なキャサリン夫人も認めるところである。

オースティンの頃は音楽の在り方が変わりつつある時期であり、職業ピアニストや音楽学校という制度ができ始めたのがちょうどこの頃であった⁶。エリザベスがダーシーを「一流の演奏家ばかり聞いていらっしゃる」と評したのは、あながちただの厭味ではなく、ロンドンにも居住するダーシーならおそらく商業演奏会での演奏を聴く機会もあったかもしれない。そうした機会はなくとも、ある程度のレベルの音楽教育を受けた人々の演奏は聞いていたのではないか。少なくとも彼の妹ジョージ

⁶ 岡田暁生は 19 世紀における音楽を取り巻く状況の変化が、音楽演奏の美学の変質をもたらしたと指摘している。（25-26）

アナはかなりのレベルに達していたのではないかと思われる。

また、*All Things Austen: An Encyclopedia of Austen's World* の *music* の項を見ると、この当時ジェントリー階級にとって、音楽は生活の一部であったことがわかる。娘たちはしばしば家族の楽しみのために音楽を奏で、同時に自分をより魅力的に見せる効果的な手段としても上手に利用した。ある親は娘のために音楽教師を雇い、またある親は音楽教育の受けられる寄宿学校に子供を行かせた (451)。しかしながら、オースティンにとって、音楽は「自ら楽しむためのもの、もしくは家族を楽しませるためのもの」であって、見せびらかすべきものではなかったのではないだろうか。アンのように練習しながら考え事をしていたのかもしれない。「結婚相手を探すための有効な手段」などという考え方は賛成出来かねたに違いない。それゆえ、エリザベスの演奏が高評価であるにもかかわらず、メアリーの演奏はひどく攻撃されているのだろう。

オースティンのこの考え方を忠実に表す場面が『マンスフィールド・パーク』 (*Mansfield Park*) にある。何も音楽に嗜みのないファニー・プライスはハープを奏でるメアリー・クロウフォード、ピアノを弾き歌うマライア・バートラム、ジュリア・バートラム姉妹と対照的に描かれている。ファニーは居候であるがゆえに音楽は習うことが出来なかったが、非常に堅実である。対して従姉妹やライバルは音楽的な才能はあるものの、分別に欠け不誠実であり、さらに節操なき女性である。普段は音楽が好きなファニーが美しい自然を前に、「調和ですわ！これが休息ですわ！絵画や音楽など遠く足元にも及ばず、この描写を試みることができるのは詩だけですわ。一切の気苦労は静まり、心は恍惚へと高まります！」 (*Mansfield Park* 113) と述べているのだ⁷。もちろんこの背後には魅惑的なハープ演奏で従兄のエ

⁷ 本稿での引用は臼田昭による翻訳 (『マンスフィールド・パーク』集英社、1978年) を参照した。ただし、引用のページ番号は末尾に

ドマンド・バートラムを誘惑するメアリーへの嫉妬もあると思われるが、興味深い意見である。オースティンが音楽を好んだことは明らかであり、この部分はオースティンの信条と矛盾するからだ。作者がファニーにこう言わせたのは、メアリーのような見せびらかすための音楽は好ましくないとの意向ではないだろうか。ファニーは音楽の才はなく、演奏会場にも出かけていないため、聞いたことのあるというのは音楽は従兄妹たちもしくはクローフォード兄妹の演奏のみである。つまり、ここでの音楽とは音楽全般ではなく、ある特殊な部分を指していると考えられる。

また、『エマ』ではヒロイン、エマはジェーン・フェアファックスの上手な演奏を聴いたあと、自らの下手なピアノや歌を恥じて練習しているが、エリザベスにはそのようなことは一切ない。オースティン自身は毎日練習し、姪にも熱心に練習するよう勧めているのにも関わらずである。エリザベスは練習不足を認めながらも、一切恥じる様子はない。聡明な彼女なら練習の必要を認めたなら、ピアノの練習に励んだであろう。つまり彼女は完璧な演奏の必要性を認めなかったのである。見せびらかすのではなく、自分が楽しむためだからこそその姿勢と見ることもできる。

ちなみに当時広まりつつあった新しい思想に染まっていると考えられるのがビングリー姉妹である。当然エリザベスとは教養に関する考え方も違い、キャロラインの口を通して語られる教養とは以下の要素が必要であった。

「そんじょそこいらの教養じゃ、むろんだめ。やはりひときわ抜きんでたというんじゃないわ、ほんとうに教養があるなんて言えないわ。教養ある女というからには、音楽

も歌も絵も踊りも、それからフランス語、ドイツ語なんてものまで、完全にできなきゃだめだわ。いいえ、そればかりじゃしないの、歩きかたから、声の調子、話しぶり、言葉づかいといったようなものにまで、なにか、こう、なんともいえないあるものがなきゃだめ、教養なんて言葉はとも当たらないわ。」(39)

これはオースティンの意図とは反する考え方であり、そのことは『エマ』を見ると明らかである。

ミセス・ゴダードは学校の教師だった。神学校や公立学校ではない。さりとして長ったらしい美辞麗句で新しい原理と制度に基づき教養と気品の高い道徳を身につけさせる、というのが謳い文句の、途方もない金を取って若い娘の健康を奪い虚栄心を植えつけるようなところでもない。まじめな本物の古めかしい寄宿学校の教師だった。(18)⁸

一方、ダーシーは教養の必須条件として読書を挙げ、「広く本を読んで、精神の修養をはかり、なにかちゃんとしっかりしたものを、持つようにならなくちゃいけないでしょうね」(39)と述べる。これはどちらかという精神性に重きを置く、昔ながらのテュルクの思想に通じるものと思われる。

女性にとって結婚が最重要事項であった時代に、エリザベスは気に染まぬ相手からの求婚を何の未練もなくきっぱりと断っている。もったいぶったコリンズはさておき、最初のダーシーのプロポーズさえ例外ではなかった。コリンズですら断られた後に「今後もう二度と、こういう結婚の申し込みをお受けにな

⁸ 本稿での引用は工藤政司による翻訳(『エマ(上)』岩波書店、2003年)を参照した。ただし、引用のページ番号は末尾に挙げた Oxford UP による。

ることが、果たしてあるかどうか。．．．残念ながら、あなたの財産分け前はしれたものでしょうし、おかげであなたの器量も愛嬌も、おそらくは台なしというところでしょうね。」(106)と当て擦り、ウィカムも引かれるエリザベスから一万ポンドという遺産を相続した他の女性に乗り換えるほど、エリザベスは財産的には不利な条件のもとにいる。限定相続のためにロングボーンは娘たちが継ぐことができず、結婚しなかった場合は住む家さえなくなる可能性もある。まさにエリザベスにとって、結婚は死活問題だったと言えるだろう(新井 84)。一方ダーシーは高慢ではあるが、「背の高い見事な骨柄、ととのった目鼻立ち、上品な物腰、．．．なんでも年収一万ポンドはあるお金持ち」(12)、そのうえ裕福なジェントリー階級という理想的な結婚相手である。現実的なシャーロットなどは求婚されればエリザベスも承諾するに違いないと決めてかかっているが、エリザベスはそうではなく、それは作者オースティンの姿勢の表明でもあった。姪のファニー・ナイトにも「愛情のない結婚をするくらいなら、なんだってそんな結婚よりましだし、我慢できる」(Austen, *JA's Letters* 280)と忠告している。実際にオースティンが一見何の問題もない求婚者、ハリス・ビッグ＝ウィザーからの申し込みを断っていることから、オースティンは実利よりも自分の感情や愛情を大切にすると推測される。この姿勢が体现されているのがまさにエリザベスである。エリザベスが大切にするのは本質であり、礼儀作法をひたすら守るのではない。例えば、ジェーンの看病のためにネザフィールドへ向かう時も、馬車が使えなければ6マイルの道のりをものともせず一人で歩いていく。母が案じたように到着したときには泥だらけであったが、それほど気にしている様子もない。彼女にとっての重要事項は大切な姉ジェーンの容態であり、ビングリー姉妹の評価ではないからだ。このように当時の慣習からひどく逸脱することはないものの、より重要なものがあると思えば自分の

心に素直に従うのがエリザベスなのである。人物の判断基準も当然階級や財産ではなく、本人の人格や教養、礼儀正しさといったものであり、先天的な身分や財産といった強みしか持たないレディ・キャサリンに対峙してもひるむことはない。ダーシーと結婚してはいけないという理不尽な要求にも、「私は紳士の娘です」(337)と一步も譲らない。華やかな曲を演奏して必死にダーシーの関心を惹こうとするキャロラインとは対極に位置し、気が進まなければ演奏もしない。それはエリザベスの気に染まぬ相手とは結婚しないという強い意志にも通じるものを示唆しているのではないか。

結び

このように『自負と偏見』における音楽はエリザベスとダーシー双方の真の人となりを浮かび上がらせ、互いの感情をプラスに動かすという大きな役割を担っていた。演奏を通じてエリザベスとダーシーを「見るものと見られるものの関係」へと導き、互いによく知りあうために必要な対話の代替物ともなっている。さらに作者オースティンの音楽に対する思想を体現する役割も果たしていたとすることができるだろう。エリザベスとダーシーは共に欠点もあるが、それぞれが好人物であり、音楽という舞台装置が彼らにより魅力を与えているように思われる。ピアノや歌を通じて現れるエリザベスの強さ・謙虚さ、ダーシーの優しさ・思いやりが彼らを相思相愛、結婚、最後は大きな幸せへと至らせるのだ。新たな思想が世間を席捲していく中、当時の慣習に逆らったこの思想こそがエリザベスの信念であり、その演奏に惹かれるダーシーの高邁な精神の証明である。最初には体面を重んじていたダーシーも、このようなエリザベスに出会ったからこそ、本人の人格を重んじるように徐々に変わっていき、最終的には「体面からいっても、儀礼、分別からいっても、利害関係からいっても」(336)困難な結婚を敢行する。こ

それはそれだけの品格と強さを合わせ持ったエリザベスだからこそ
掴み得たハッピーエンドである。

引用・参考文献

- Austen, Caroline. *My Aunt Jane Austen—A Memoir—*. London: Jane Austen Society, 1952.
- Austen, Jane. *Emma*. 1816. Ed. James Kinsley. London: Oxford UP, 2008.
- . *Jane Austen's Letters*. 3rd ed. Deirdre le Faye. Oxford: Oxford UP, 1995.
- . *Mansfield Park*. 1814. 3rd ed. R. W. Chapman. Oxford: Oxford UP, 1934.
- . *Northanger Abbey and Persuasion*. 1816 and 1818. 3rd ed. R.W. Chapman. Oxford: Oxford UP, 1933.
- . *Pride and Prejudice*. 1813. 3rd ed. R.W. Chapman. Oxford: Oxford UP, 1965.
- . *Pride and Prejudice*. 1813. Ed. Tony Tanner. London: Penguin, 2003.
- . *Sense and Sensibility*. 1811. 3rd ed. R. W. Chapman. London: Oxford UP, 1933.
- Austen-Leigh, James Edward. *Memoir of Jane Austen*. Ed. R. W. Chapman. London: Oxford UP, 1926.
- Babb, Howard S. *Jane Austen's Novels: The Fabric of Dialogue*. Columbus: Ohio State UP, 1962.
- Cameron, Norman. "Jane Austen and Music." *Chesterian* 19 (1937-38): 33-38.
- Mudrick, Marvin. *Jane Austen: Irony as Defense and Discovery*. Princeton: Princeton UP, 1952.
- Olsen, Kirstin. *All Things Austen: An Encyclopedia of Austen's World*. Westport, 2005.

- Piggott, Patrick. *The Innocent Diversion: A Study of Music in the Life and Writings of Jane Austen*. London: Douglas Cleverdon, 1979.
- . "Music." *The Jane Austen Companion*. Ed. J. David Grey, A. Walton Litz, and Brian Southam. New York: Macmillan, 1986. 314-316.
- Sands, Mollie. "Jane Austen and Her Music Book." *Collected Reports of the Jane Austen Society, 1949-1965*. Jane Austen Society. London: Dawson, 1967. 91-93.
- Wallace, Robert K. *Jane Austen and Mozart: Classical Equilibrium in Fiction and Music*. Athens: U of Georgia P, 1983.
- Wright, Andrew H. *Jane Austen's Novels: A Study in Structure*. London: Chatto, 1957.
- 新井潤美.『自負と偏見のイギリス文化—J・オースティンの世界—』
東京：岩波書店，2008.
- オースティン，ジェーン.『エマ』工藤政司訳．東京：岩波書店，2003.
- .『ジェイン・オースティンの手紙』新井潤美編訳．東京：岩波書店，2005.
- .『自負と偏見』中野好夫訳．東京：新潮社，2009.
- .『マンスフィールド・パーク』臼田昭訳．東京：集英社，1978.
- オースティン＝リー，ジェームズ・エドワード.『思い出のジェイン・オースティン』永島計次訳．東京：近代文藝社，1992.
- バッハ，カール・フィリップ・エマヌエル.『正しいクラヴィーア奏法 第一部』東川清一訳．東京：全音音楽出版社，2004.
- クープラン，フランソア.『クラヴサン奏法』佐藤峰雄訳．東京：音楽之友社，1979.
- 岡田暁生.『ピアニストになりたい』東京：春秋社，2008.
- テュルク，ダニエル・ゴットロープ.『クラヴィーア教本』東川清一訳．東京：春秋社，2000.